

AIの活用：人を機械の下請けにするな**AIの活用；人を機械の下請けにするな**

昨年は人工知能(AI)がたびたび話題となり、今年も大きな関心と呼ぶと思われる。機械であるコンピュータの知能が急速に発展し、人間の知能を超える能力が報じられ、今の学校教育では、卒業したときに、学生が期待していた知的な仕事が機械に取って代わられるかもしれないと憂慮された。

囲碁ソフトがプロに勝つたり、対戦を勝ち抜いた棋士が将棋ソフトを利用したのではないかと疑われた例が報道された。いずれも、コンピュータの能力向上が人間の予想を超えて早いことを示している。

囲碁や将棋のように勝負のルールが明快に規定されているゲームでは、AIが膨大な対局例を記憶し、その中から最も適切な手をすみやかに選ぶのは得意だ。さらに、相互にAIが24時間疲れを知らずに対戦経験を積めば、強くなるのは当然で、生まれたときは能力がゼロの人間はかなわないと思う。

この高い知的能力を持つ機械をライバルではなく協力者として、いかに有効に活用するかが問われている。文部科学、経済産業、総務の各省は、理化学研究所、産業技術総合研究所、情報通信研究機構に、それぞれ研究の中核組織をスタートさせた。そこではおのおのが技術の方向性を探っている状況だ。

一方、コンピュータが東京大学の入試問題に挑戦し、合格点を獲得できるかのプロジェクトでは、AIが長文の文脈の解釈や問題の意味の理解などが苦手なことが明らかになった。

人間と機械とが緊密に協力するには、人間の意図を機械が正確に理解し、機械の意図が人間に直ちに伝わるような情報交流技術が欠かせない。

これからのAIは、人間の気持ちに寄り添い、空気が読めるようなマン・マシン情報交流技術の開発が重要な開発課題となるのではないか。

筆者は人間の仕事が将来どうなるかが非常に気になる。知的な仕事の一部は機械がはるかに早く的確にできるようになった時に、人間を機械の下請けにはしたくない。人間でなければできない仕事を明らかにして教育のプログラムを見直す必要がある。前述のマン・マシン情報交流技術は、その一例で、人間を知り、機械を理解できる人間でなくては開発できない。